12′) Sagalyn: The Production and removal of small ions and charged Nuclei over the Atlantic Ocean. Recent Advances in Atmospheric Electricity. Pergamon Press. 1958.
13) Arakawa: The atmospheric electric field and the air mass conditions. 欧文彙報, Vol. 11, p. 105～110.
13′) Arakawa: Atmospheric electric field and cyclones. 欧文彙報, Vol. 13, p. 211～214.
14) Koenigsfeld: Investigation of the Potensial gradient at the Earths ground Surface and within the free atmospher. Thunderstrom Electricity. Chapter III. The University of Chicago Press: 1953.
15) Giorgi: Sur les rapports entre le champ electrique at du masses d'air. I. U. G. G. Association of Met, Rome, Sept. 1956. (M. A. B. 9. 6～277 より).
16) Schaefer: Atmorpheric Electricity associated with jet stream. Geophysical Research Paper No. 42.
17) Graystone: Atmospheric electricity and jet streams. Meteorological Magazine, London, 83 (1989): 347, Nov. 1954. (M.A.B. 63～365 より),
18) Berger: Beeinflussung des Luftelektrischen Potentialgefälles. Zeit. f. Met. Bd. 10H. 8; 1956, p. 244～249.
19) Stewart: Some recent changes in atmospheric electricity and their cause. Q.J. of the Royal Met. Society, Vol. 86, No. 369, p. 399～405.

天気に関する伊須気余理姫の歌

肥 沼 寛 一*

日本には，非常に古くから天気の変化に関する知識があったことを示すものとして，古事記中巻にある伊須気余理姫の歌が引き合いに出される。

この姫は神武天皇が即位されると皇后に迎えられた方で，神沼河耳命（第二代の天皇）外二皇子の母である．ところで，神武天皇が崩御されると，神沼河耳命の異母兄タギシミミノ命が皇位につこうと策した．これを知った姫は

狭井川よ雲立ちわたりうねび山
　　木の葉さやぎぬ風吹かんとす

という歌に詫してタギシミミノ命の計画を神沼河耳命たちに知らせたというのである。この歌は，明らかに天気の変化を詠じたものだが，このような歌によって，事件の発生が予告できたということは，天気変化に関する経験的の知識がある程度普及していたためと考えられよう．それなら，この歌の作られたのは，いつ頃のことだったであろうか．

神武天皇即位の年は，古事記では不明だが日本書記によると西紀前660年だという．そして，天皇は皇位にあること76年にして崩御されたというから，上の歌の作られたのは西紀前6世紀に当る．このことから，故藤原咲平先生**は，日本における天気変化に関する知識は，バビロンやアツシリアと同程度に古いと考えられた．しかし，現在の日本史についての研究から見ると，これは誤解のようである。

神武天皇紀元は約600年ぐらい長すぎるということは，歴史学者の間では早くから知られていたらしい．けれども，明治以来，一般的には神武紀元は正しいものとして教えられて来た．戦后になって古代日本の研究が盛んになり，その結果，西紀前5～6世紀頃の日本では，まだ稲作は始まらず，石器と縄文土器の文化を持った人々が，たて穴住居に住んでいたことが明らかになった．そして，大和朝廷を中心として日本国が形成され始めたのは西紀3世紀のことらしいから，仮りに神武天皇を実在の方と見ても，2世紀より古くはない．

古事記や日本書記にのっている歌のうちには，形式や内容から見て，古いものも，新しいものも含まれているらしいが，伊須気余理姫の歌は31文字の形式が完全にととのったものだから，6～7世紀よりも古くはさかのぼれないのであるまいか．しかし，天気に関する知識は，おそらく，もっと古くからあったものと思う．

一般に，天気に関する経験的知識は，漁業や農業と共に発達したものであろう．日本で稲作の始まったのは西紀前3世紀頃からと推定されているし，西紀前后には朝鮮半島との往来も相当に行われたことが大陸の記録からうかがえる．ただし，その頃の日本はシャーマニズムの盛んな時代で，人々は神のおつげで行動していたらしいから，天気に関する経験的知識が活用されたのかどうかは不明である．けれども，5世紀の始めの仁徳天皇の頃になると，韓人を使って溜池を堀ったり，堤防を作ったりしているが，それはおそらく農業のためと思われるから，天気に関する経験的知識もこの頃には次第に進み始めたものと思う．

* Kanichi Koenuma, 気象庁予報部
** 藤原咲平: 天気予報と暴風警報, 気象研修所通信教育テキスト, 補講第11分冊.